

老人福祉施設における社会化に関する一考察

—訪問ボランティアの有効性と課題—

A Study of the Social Interaction at Nursing Homes, Especially in Regards to the Efficacy of Visitation

(1998年3月31日)

小野 昌彦* 土谷由美子* 高塚 延子** 中村 貴志***
Masahiko Ono Yumiko Tsuchiya Nobuko Takatsuka Takashi Nakamura

要 約

特別養護老人ホーム在住の痴呆性老人2名に対して、訪問ボランティア活動を実施し、その有効性と問題点を検討した。訪問ボランティア活動は、12回(週2回)実施された。内容は、歌唱指導と面接であった。その結果、痴呆性老人2名ともボランティア活動中の発話量、社会的行動の増加がみられ、訪問ボランティア活動の有効性が示された。考察において、老人福祉施設の社会化という観点から、施設内の処遇評価に対応した形での施設外の社会資源の導入が今後の課題であるとされた。

Key words: 老人福祉施設, ボランティア, 施設の社会化

I. 問題と目的

施設の社会化は、社会福祉において重要な問題の一つである。施設の社会化とは、「社会保障制度の一環としての社会福祉施設が、施設利用者の人権保障、生活構造の擁護という公共性の視点にたって、その施設における処遇内容を向上させると共に、そのおかれたる地域社会のニーズを充足・発展させるために、その施設の所有する場所・設備・機能・人的資源などを地域社会に解放・提供し、また地域社会の側からの利用・学習・参加などの働きかけに応ずるといふ、社会福祉施設と地域社会の相互作用の過程をいう」と定義される(秋山, 1978)。

この施設社会化の問題は、1950年代から議論され、1970年代から具体的な問題として議論されるようになった。牧里(1983)は、施設の社会化を、①施設情報の公開、②ボランティアの受け入れ、③施設・設備の地域開放、④施設処遇の地域化、⑤施設運営の民主化、の5つに分類している。

中国短期大学幼児教育科* さわらび苑** 西南女学院大学保健福祉学部福祉学科***

老人福祉施設においても、この施設の社会化の問題は、重要な問題である。特に近年ボランティアの受け入れに力が注がれている（光本，1994）。有給職員の他に無給で自発的、自主的に自己の労力・知識・技術などを提供するボランティアは、老人福祉サービスの分野では、老人ホーム訪問活動（話し相手、趣味・レクリエーション活動など）、配食サービスにおける食事配達等がある。全国社会福祉協議会の調査（1987）においても全国の老人ホームの86%がボランティアを受け入れている現状であるが、「受け入れ体制が整っていない」、「必要ない」という意見も出されているのが現状である（光本，1994）。

一般的に言うならばボランティアの本来の機能は、有給職員の恒常的な業務としては成立し得ない、一時的、周知的、補助的、特殊な援助、あるいは市民による自然発生的でインフォーマルな働きかけの方が望ましい援助といえよう（冷水，1994）。従って、有機的な老人ホームにおける福祉連携という点からも「できる限り具体的にその機能を明確にする必要がある」（冷水，1994）といえよう。

ソーシャルワークの分野において、個々の処遇法の効果を検討する方法として単一事例調査法（single-case research designs）の有効性が指摘されている（桑田，1998）。

そこで、本研究は、特別養護老人ホーム在住の痴呆性老人への訪問ボランティア活動へ単一事例調査法を導入し、その有効性と問題点を検討することを目的とする。

II. 対象及び活動

1. 対象

痴呆性老人2名。対象者の概要をTable 1に示す。

Table1 対象者の概要

対象者	性別	年齢	痴呆スコア	原疾患
N.Y	女	77	11	脳血管性痴呆
S.O	女	88	12	脳血管性痴呆

（痴呆スコアは長谷川式知能評価スケールによる。20点以下が痴呆である。）

2. 活動

- 1) ボランティア期間：平成9年3月～平成10年3月（週1～2回）
- 2) データ収集期間：平成9年3月6日～20日（実施日 6日，9日，11日，13日，16日，20日）。
- 3) ボランティア実施状況：1日2回午前と午後，6日間にわたり，計12回15分ずつ実施。
- 4) デザイン：単一事例調査法のABデザインを適用した。ABデザインとはベースライン（A）

と治療（B）の二つのフェイズを持つデザインである。

5) ボランティアスタッフ：短期大学教員2名。

III. ボランティア活動の実際

対象者S. O（以下Oとする）のボランティアの経過を以下に示す。データ収集期間におけるボランティア活動をその活動目標及び活動内容から3期に分けて記述する。

1. 第1期（3月6日～9日）：ベースライン期

1) 目的及び活動内容：この期間は、4回の訪問ボランティアが実施された。基本的にかかわり形成と行動観察が実施された。訪問者は、「何か感想があったら私に教えてください」と対象者に伝え、その後5分間の対象者の発話回数及び発話内容と社会的行動の観察を実施した。これらの観察結果は、訪問スタッフ1名とその時点で協力可能な状態にある施設職員によって記録された。発話回数の記録方法は、5分間の対象者の発話を10秒毎のインターバルレコーディング法で記録した。インターバルレコーディング法とは、5秒間内で目的行動が生じたか、生じないかを1回ずつ観察者が記録するものである。1つの間隔内で複数の反応が生じることがあるが、その場合には単一の生起として記録した。発話内容は、訪問活動後に記録された。社会的行動は、PollackとNamazi（1992）の行動チェックリスト（カテゴリーをFig.1に示す）に従い、5分間の対象者の行動を10秒毎のインターバルレコーディング法によって記録した。

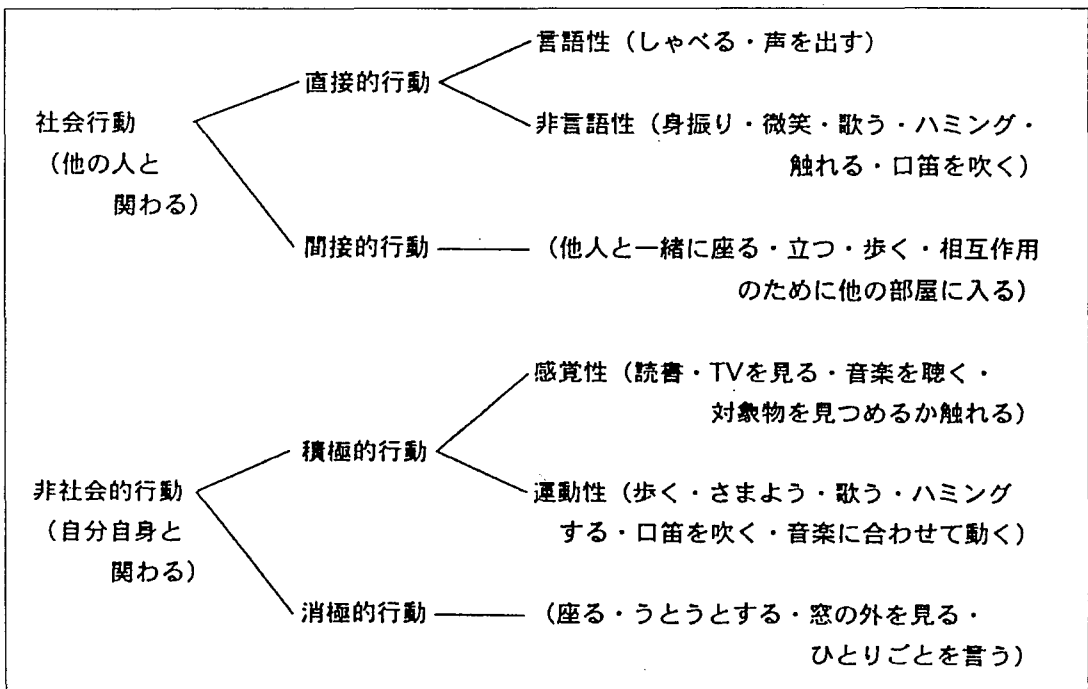


Fig.1 PollackとNamaziの行動チェックリスト

2) 活動経過：第1回（3月6日午前10時～11時）：Oは「あらあら先生されているんですか」、「散らかしていますが」と最初に言った。ご主人が早くなくなられたこと、息子さんが退職後、近所の写真を撮りに行くことを話す。この内容の繰り返しが多かった。

第2回（3月6日午後2時～3時）：ホールにおいて、周りに気を取られながら壁に貼っているカレンダーの絵を見てきれいだと言ったり、色紙に書いてある文字を読む。ドライブをして、良い音楽を聴きながらコーヒーを飲みたいをくりかえし話した。そこで、スタッフが、どのような音楽が好きかを問うと「流浪の民や唱歌」がいいと答えた。

第3回（3月9日午前10時～11時）：「今日は天気がいい」を繰り返し話す。写真をスタッフに見せながら息子、孫、曾孫、犬の話を繰り返し話した。窓から見える新幹線をみて「新幹線が通る」を繰り返し話した。

第4回（3月9日午後2時～3時）：訪問した際は、テレビをインターホンで聴いていた。外の天気がとてもいいと繰り返し話す。何かしてみたいとのことであったので好きな歌を歌うのはどうですか、と尋ねると良いですねと答えた。そこで次回から音楽の活動をボランティア活動に含めることとした。

この期間のOの発話回数、社会的行動の推移をFig.2とFig.3に示す。発話回数は、18, 33, 34, 37と徐々に増加した。社会的行動に関しては、社会的直接的行動が、19, 25, 32, 21, 35であった。非社会的消極行動が、2回及び3回目のボランティア活動の際に見られた。

2. 第2期（3月11日～3月13日）：A条件（「流浪の民」をスタッフと歌う）

1) 目的及び活動内容：この期間は、4回の訪問ボランティアが実施された。目的は、発話回数の増加と社会的行動の増加であった。ボランティアの内容は、音楽活動及び面接（5分間）であった。音楽活動は、高橋（1996）を参考に以下の手続きで実施した。

- ① スタッフは、伴奏しながら曲（流浪の民）の一番を初めから終わりまで歌った。
- ② スタッフは対象者に「さあ、歌ってください」と指示した。歌うことが可能な場合は、社会的承認（誉めるなど）を与え、スタッフが伴奏した。歌うことが可能とは、音楽のリズム、旋律、歌詞という点で評価し、対象者のリズム、旋律に対してはスタッフが対応できるものを可能（正反応）とし、歌詞については、歌詞が聞き取れるものを可能とし、その正反応が90%以上あるものを「歌うことが可能」とした。それ以下のものは、「歌うことが不可能」とした。
- ③ 歌うことが不可能な場合は、以下の手続きをとった。TはCの様子を見ながら、ゆっくりしたテンポで（♩=60）、対象者に対して原調が高ければ、調を下げて（B dur位から）1フレーズ（歌詞の切れるところ）ずつに切って先を歌い、対象者に「さあ歌ってください」と指示した。対象者が部分的にでも歌えた場合には、社会的承認を与えた。次にスタッフは1フレーズを徐々に拡大してゆき、1フレーズずつ増やしていく。1フレーズずつに切ってもCが歌えない場合は中止した。

歌唱指導の後面接が実施された。面接の評価は、第1期と同様、スタッフは、「何か感想

があったら私に教えてください」と対象者に伝え、その後5分間の対象者の発話回数及び発話内容と社会的行動の観察を実施した。これらの観察は、訪問スタッフ1名とその時点で協力可能な状態にある施設職員によって記録された。発話回数の記録方法は、5分間の対象者の発話を10秒毎のインターバルレコーディング法で記録した。インターバルレコーディング法とは、5秒間内で目的行動が生じたか、生じないかを1回ずつ観察者が記録するものである。1つの間隔内での複数の反応が生じることがあるが、その場合には単一の生起として記録した。発話内容は、訪問活動後に記録された。社会的行動は、PollackとNamazi(1992)の行動チェックリスト(カテゴリーをFig.1に示す)に従い、5分間の対象者の行動を10秒毎のインターバルレコーディング法によって記録した。

2) 活動経過：第5回(3月11日午前10時～11時)：この回からスタッフはキーボードを持参した。キーボードに対して興味を示し、河原に持って行ってみんなで歌いたいと話した。「流浪の民」は、小さな声で口ずさむ程度であった。面接においてもキーボード、歌の話が多かった。

第6回(3月11日午後2時～3時)：大きな声で歌を歌う。4人部屋であったため、隣の人に迷惑ではないだろうかと気を取られながら歌っていた。面接においては、昔歌っていた曲名が話された。

第7回(3月13日午前10時～11時)：「流浪の民」を大きな声で歌う。面接においては、キーボードの話となり、好きな曲を弾いて欲しいとスタッフに要求した。

第8回(3月13日午後2時～3時)：訪問時は、昼寝中であった。しばらく時間が経過してから歌を歌ったが、声は小さかった。楽譜に記してある作詞者、作曲者を読もうとしたり、音譜を読もうとした。読む時間が長く、発話数が少なかった。

この期間のOの発話回数、社会的行動の推移をFig.2とFig.3に示す。発話回数は、5、4、

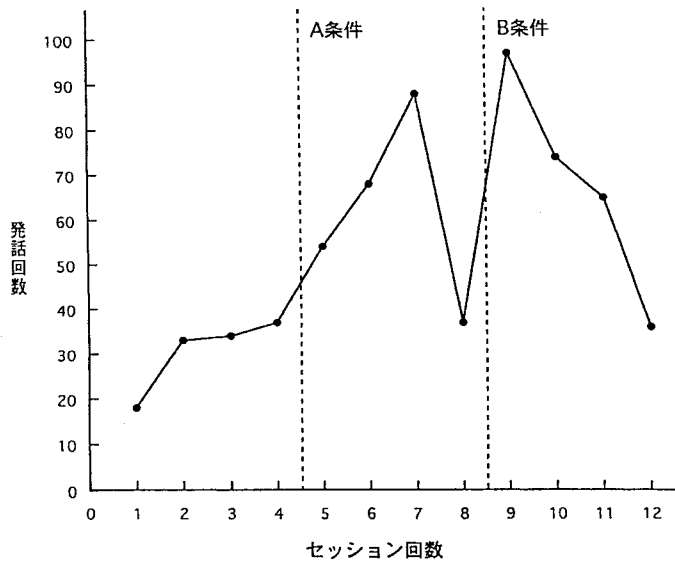


Fig.2 対象者Oの発話回数の推移

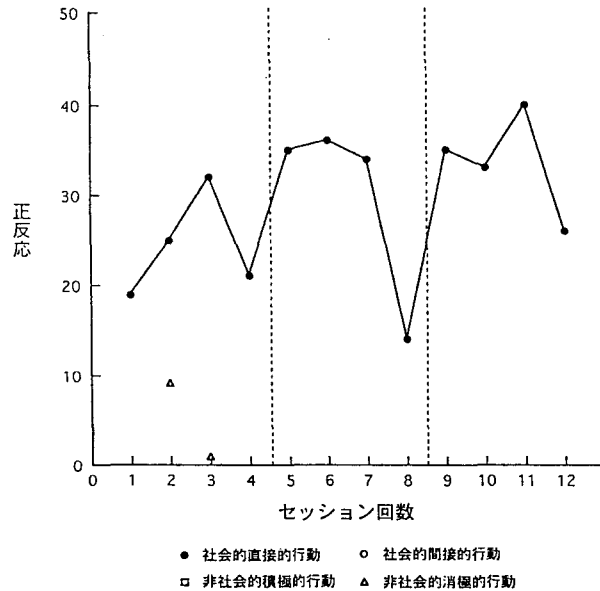


Fig. 3 対象者Oの社会的行動の推移

68, 88, 37であった。社会的行動に関しては、社会的直接的行動が、35, 36, 34, 14, であつた。非社会的消極的行動は、この期間のボランティア活動の際は見られなかった。

3. 第3期（3月16日～3月20日）：B条件（「流浪の民」及び「早春賦」をスタッフと歌う）

1) 目的及び活動内容：この期間は、4回の訪問ボランティアが実施された。目的は、第2期と同じく発話回数の増加と社会的行動の増加であつた。ボランティアの内容は、音楽活動及び面接（5分間）であり、手続きは、2期と同様であつた。曲は、「流浪の民」及び「早春賦」であつた。

2) 活動経過：第9回（3月16日午前10時～11時）：「流浪の民」, 「早春賦」を大きな声で歌う。みんなで合唱できたらいいと話した。

第10回（3月16日午後2時～3時）：「流浪の民」, 「早春賦」を大きな声で歌う。隣の人の様子を気にする発言をする。

第11回（3月20日午前10時～11時）：訪問すると自分のキーボードをホールで弾いていた。「流浪の民」, 「早春賦」を大きな声で歌った。面接においては、キーボードの各部分をさわって話をした。

第12回（3月20日午後2時～3時）：隣の人が気になり、ホールで歌うことになった。「流浪の民」, 「早春賦」を小さい声で歌った。周りを見ながら歌っていた。

この期間の彼女の発話回数、社会的行動の推移をFig.2とFig.3に示す。発話回数は、97, 74, 65, 36であつた。社会的行動に関しては、社会的直接的行動の正反応が、37, 33, 40, 26, であつた。非社会的消極的行動は、この期間のボランティア活動の際は見られなかった。

IV. 考 察

本研究においては、特別養護老人ホーム在住の痴呆性老人への訪問ボランティアの12回（20日間）の効果が検討された。本症例は、ボランティア中の発話量は、状況の変化（昼寝、ホール移動）による減少も見られたがベースライン期と比較してA条件、B条件期において増大した。また、ベースライン期と比較してA条件、B条件期において社会的行動の直接的行動も多少の変動が見られたが増加した。さらに非社会的消極的行動は、ベースライン期においてみられたが、その後はみられなくなった。

以上のことから特別養護老人ホーム在住の痴呆性老人への訪問ボランティアは、発話量の増加及び社会的行動の直接的行動の増大に有効であることが示された。

老人福祉施設における処遇の評価に関しては、老人のADLや社会性、精神状態の評価などが行われている（光本，1994）。本研究における単一事例調査法は、多様な処遇目標への多様な処遇方法の評価をより個別的にきめ細かく実施できる点が異なるといえよう。しかしながら、本研究においては、ABデザインであり、変数の特定に際しては弱いものであった。今後、より実証的なデザインを適用する事が課題である。

施設の社会化に関して、現在まで様々な議論がなされている。基本的に、ボランティアの機能が「一時的、周辺の、補助的、特殊的な援助、あるいは市民による自然発生的でインフォーマルな働きかけの方が望ましい援助などを引き受けること」（冷水，1994）であるから老人福祉施設内における処遇評価にもとづき、対象者にとって有益であると予測されるサービスを施設外から導入することが望ましいといえよう。

したがって、今後は、老人福祉施設入所者の評価に対応した形での施設の社会化が、重要な課題であるといえよう。

謝辞 本活動にご協力いただきました特別養護老人ホームさわらび苑職員の皆さんに感謝申し上げます。

文 献

- 秋山智久：施設の社会化とは何か—その概念・歴史・発達段階，社会福祉研究，23，39—44，1978。
米本秀仁：老人ホーム・サービスの現状と課題，冷水豊・浅野仁・宮崎昭夫（編），老人福祉 政策・処遇の視点と方法 第3版 社会福祉入門講座9，海声社，188—197，1994。
桑田繁：ソーシャルワークにおける単一事例調査法のデータ評価，ソーシャルワーク研究，23，4，1998。
牧里每治：施設社会化の到達点と課題，社会問題研究（大阪府立大学），33，1，119—151，1983。
冷水豊：老人福祉サービスの提供組織とマンパワー，冷水豊・浅野仁・宮崎昭夫（編），老人福祉

小野 昌彦 土谷由美子 高塚 延子 中村 貴志

政策・処遇の視点と方法 第3版 社会福祉入門講座9, 海声社, 112-126, 1994.

高橋多喜子：痴呆性老人の音楽セッションにおける「馴染みの歌」の有効性についての検討－「馴染みの歌」と「初めての歌」を比較して－；日本バイオミュージック学会誌, 13, 132-138, 1996.